

機関番号：56301

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19401026

研究課題名（和文） 中国浙江省における戦国大名沈没船に関する日・中共同研究

研究課題名（英文） A research of the sunken vessel at East China Sea in 16th century

研究代表者

鹿毛 敏夫（KAGE TOSHIO）

新居浜工業高等専門学校・一般教養科・准教授

研究者番号：60413853

研究成果の概要（和文）：

中国に残された文献史料によると、嘉靖36（1557）年に日本の戦国大名大友義鎮が浙江省に派遣した貿易船が、舟山島の岑港で沈没した。「巨舟」と記されたその船は、当該期東シナ海域を往来する船のなかで最大級の大型構造船であった。本研究の現地調査において、沈没船の時代に関わる考古遺物を確認できたとともに、船の母港の都市空間構造を明らかにすることができた。また、共通の意識を有する中国の研究者との連携体制を構築するとともに、国際学会を通じて研究成果を世界的に発信することができた。

研究成果の概要（英文）：

Otomo Yoshishige dispatched his foreign trade vessel to China in 1557. But the vessel sank in the sea. The vessel was the largest scale at the East China Sea in the middle of the 16th century. As the results of a research, we found some remains of 16th century, and made clear the structure of the city that the vessel had homeported. In this research, we acted in cooperation with some Chinese researchers, and gave a paper at an international academic conference.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
総計	7,600,000	2,280,000	9,880,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：人文学A・日本史

キーワード：戦国大名、沈没船、国際情報交換、中国

1. 研究開始当初の背景

九州の戦国大名大友氏に関しては、この10年間で考古学的アプローチによる研究成果の蓄積が著しく進歩した。中世400年間にわたり府内（大分市）を本拠に豊後を統治

した大友氏の大名館跡や、大名蔵跡、周辺に5000軒あったと記録される町屋跡の総合的発掘が現在も継続されており、14～16世紀の国産土師器や輸入陶磁器、キリスト教関連遺物などが続々と出土している。

特筆されるのは、中国や朝鮮半島、琉球、東南アジア諸国からの陶磁器の出土量の多さと多様さである。九州は、日本列島の端に位置する小島であるが、国境のない中世においては、日本列島の国家秩序に位置づけられるとともに、中国浙江省を中核とする環シナ海域世界の国際秩序の一角を占めていた。

16世紀のいわゆる世界史における大航海時代は、従来、日本史の分野においては、ヨーロッパ諸国がアジア及び日本に到着し日本国内で西洋の文化や技術が開いたとする、受け身の歴史として認識されがちであった。しかしながら、同時期の西国大名は、日本という国の枠を越えた極めて能動的なアジア外交を展開していたのであり、本研究でその能動的な歴史の実態の一端を明らかにし、世界的レベルでの日本人の活動の具体的様相を歴史的に明証することを目標にかかげた。

2. 研究の目的

中国の『明世宗実録』によると、嘉靖36(1557)年に日本の戦国大名大友義鎮は使僧ら40余人を明へ派遣し、対明貿易の公許を申請した。記録には「以十月初、至舟山之岑港泊焉」とあり、彼らの「巨舟」が10月初めに浙江省舟山の岑港(舟山島西部の港)に着岸した事実が判明する。大友氏の「巨舟」は翌月まで岑港に停泊して貿易許可を待ったが、折しも倭寇王直と明官軍の軍事騒動に巻き込まれ、岑港の海底に沈没してしまった。

これら文献史料が示す歴史的事実を念頭に、本研究の目的は、①16世紀の舟山岑港の地理的位置を現地比定すること、そして、②1557年に岑港に沈没した大友宗麟の貿易船の遺物を捜索し、その引き揚げの可能性を探ること、また、③船を失った大友氏の遣使一行が新たな船を建造した「柯梅」の位置を現地で確定させること、の3点に置いた。

3. 研究の方法

本研究の具体的な研究方法は以下の5点である。

(1) 文献史料の検索と分析

①日本側文献史料による遣明船記述の検索と分析

「大友家文書録」「島津家文書」「大友文書」「大友松野文書」「岐部文書」「田北文書」「若林文書」「合沢文書」「薬師寺文書」「上野文書」「安部文書」「斎藤文書」その他を網羅的に検索し、関連史料を抽出した。

②中国側文献史料による遣明船記述の検索と分析

「日本一鑑」「明世宗実録」「籌海図編」「東西洋考」「朝鮮王朝実録」その他を網羅的に検索し、関連史料を抽出した。

(2) 中世の大名船についての考察

環シナ海域における引き揚げ沈没船の実例を調査し、当該期の日本の大名船の物理的構造について考察した。

(3) 中世の港町についての考察

日本、中国、韓国をはじめ、当該期の港湾都市とその関連遺跡を世界的に幅広く踏査し、中世の港町の景観と機能について考察した。

(4) 中国における現地調査

浙江省における遣明船関連史料の調査、岑港での1557年の沈没船(大友義鎮の貿易船)の遺物調査、16世紀の舟山島柯梅の地理的位置の現地比定を行った。

(5) 研究シンポジウムの開催と国際学会での研究成果の報告

中世港湾都市に関わる研究者を招いてのシンポジウムを開催したとともに、中国やヨーロッパで開催された国際学会にて本研究の成果を幅広く公開した。

4. 研究成果

本研究で得られた成果は以下の8点である。

(1) まず第1は、中国浙江省舟山島の現地調査において、研究の主対象である戦国大名沈没船の時代に関わる考古遺物を確認できたことである。船が沈んだ岑港の16世紀の遺物として、鉄砲弾、大砲弾、権、陶磁器片、その他複数の遺物が確認され、研究を大きく推進することができた。今後、各遺物を詳細に分析するとともに、より幅広く遺構の確認作業を進めていく必要がある。

(2) 第2は、船の母港である豊後府内の都市空間構造の解明を進めることができたことである。研究協力者との共同作業により、都市中心部の空間構造が段階的に明らかにされ、また、海に面する外港の機能も明確化されてきた。今後、文献史学と考古学の双方の成果を照合させて、より一層の構造解明を進めていく予定である。

(3) 第3は、中国の研究者との情報交

換を深める体制が一層強化されたことである。現地に近い浙江工商大学、および寧波大学で開催された2つの国際シンポジウムで本研究の趣旨と研究状況を発表した。その成果もあり、同じ研究志向をもつ複数の中国人研究者と情報交換を行うことができた。今後、更に国際的連携を深めて、類似研究の推進をはかっていきたい。

(4) 第4は、日・中共同による本研究の成果を、日本語と中国語の双方の言語でまとめて、広く公開することができたことである。日本語では『史学研究』や『海路』等の学術雑誌に「戦国大名領国の国際性と海洋性」「16世紀のBungoと大友宗麟の館」等の成果を発表し、また、中国浙江大学出版社より刊行された『舟山普陀与東亜海域文化交流』に「日本“九州大邦主”大友氏与舟山島」を中国語で発表することができ、中国での現地調査の成果を含めた本研究成果をより幅広い中国人研究者に提供することが可能になった。

(5) 第5は、東アジアの日中関係史の一側面として収斂しがちの本研究を、西洋史を含めたよりグローバルな世界史の史的構造のなかに位置づけて研究報告することができたことである。ポルトガルのリスボンで開催された国際研究会において本研究の趣旨と成果を英文発表したことで、本研究に対する西洋の研究者から様々な意見や評価を得ることができ、今後の発展的研究の方向性を明確化することができた。

(6) 第6は、豊後の古代からの要港である佐賀関について、その機能や空間構造を明らかにすることができたことである。佐賀関は、古代の海部の系譜をひく豊後水道の伝統的な港町である。リアス海岸の天然の入り江には、中世には戦国大名大友氏の水軍衆に編成された海民たちが生業を営んでおり、漁労や船を使った物資の輸送活動を行いながら、家臣として大名に奉公する武士たちの存在が複数の史料から確認できた。その成果は、港湾空間高度化環境研究センターHPを利用して一般公開している。

(7) 第7は、中世から近世にかけて西日本のより広域な大名権力のアジア外交と、その対外政策に育まれた西日本の外交都市の歴史の実態を比較史の観点から明らかにすることができたことである。本研究の沈没船の母港である豊後府内のみならず、当該期日本の政

治的中枢である畿内の室町幕府や豊臣政権と密接に結び付いた堺、遣明船の寄港地から戦国大名松浦氏の時代を経て江戸幕府初期の貿易拠点へと性格を変転させていった平戸、そして、戦国大名大村氏の町建てから近世には江戸幕府による貿易統制の恒常的拠点として機能した長崎、という4つの交易都市の歴史的背景をふまえて遣明船の意義を考察することが可能となった。

(8) 第8は、特定の時期や地域に限らず、日本の中世社会そのものが全体的に有していたアジア的性質を明確化できたことである。西日本の戦国大名の領国制の展開は、大陸に近い地の利を活かして、アジア史の史的展開のなかに自らの領国制のアイデンティティを追求しようとする国際的地域政権の営みであり、しかも、そのアジア的志向性は、当該政権の政治・外交・経済・文化のあらゆる面で通底する本質を有していた。この分析と考察の成果については、日本史で「守護大名」や「戦国大名」と呼称する日本国内の一地域公権力の政権定義の枠組みをはるかに越えているため、今後、アジア的守護・戦国大名、通称「アジア大名」と呼称することを提唱して、2011年度下半期に1冊の書物として一般公開する準備を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計11件)

- ① 鹿毛敏夫、日元禅僧の国際交流と大友氏、日本中世の西国社会、査読無、3巻、2011、pp.271~293
- ② 鹿毛敏夫、日本戦国大名大友義鎮的遣明船、人物往来与東亜国際交流、査読有、2010、pp.277~284
- ③ 鹿毛敏夫、南蛮交流、史跡で読む日本の歴史、査読無、8巻、2010、pp.111~134
- ④ 鹿毛敏夫、日本“九州大邦主”大友氏与舟山島、舟山普陀与東亜海域文化交流、査読有、2009、pp.153~161
- ⑤ 鹿毛敏夫、アジア大名家から生まれたキリシタン大名、海路、査読無、8巻、2009、pp.20~31
- ⑥ 鹿毛敏夫、大友氏三代の閩関、歴史読本、査読無、54-4号、2009、pp.144~147
- ⑦ 鹿毛敏夫、戦国大名領国の国際性と海洋性、史学研究、査読有、260号、2008、pp.1~17
- ⑧ 鹿毛敏夫、川からの中世都市、戦国大名大友氏と豊後府内、査読無、2008、pp.59~86

- ⑨ 鹿毛敏夫、16世紀の Bungo と大友宗麟の館、海路、査読無、5巻、2007、pp.10～22
- ⑩ 鹿毛敏夫、アジアに開けた府内、大分・由布の歴史、査読無、2007、pp.82～83
- ⑪ 鹿毛敏夫、府内の外港の繁栄と「瓜生島伝説」、大分・由布の歴史、査読無、2007、pp.96

[学会発表] (計12件)

- ① 鹿毛敏夫、日元間の禅僧交流と九州の守護大名、広島史学研究会、2010年10月31日、広島大学
- ② 鹿毛敏夫、The Paintings, Maps, Documents and Relics about “Bungo”、Lisbon International Workshop “Maritime Trade in East Asia”、2009年11月2日、ポルトガル・リスボン
- ③ 鹿毛敏夫、日本「九州大邦主」大友氏と舟山島、浙江省中日関係史学会、2009年1月10日、中国寧波大学
- ④ 鹿毛敏夫、川からの中世都市、大友氏研究会、2008年10月5日、大分市
- ⑤ 鹿毛敏夫、中世の九州とアジア、長崎学講座、2008年9月21日、大分市
- ⑥ 鹿毛敏夫、日本戦国大名大友宗麟的遣明船、浙江工商大学国際シンポジウム、2008年7月26日、中国杭州
- ⑦ 鹿毛敏夫、16世紀の環シナ海域交流と瀬戸内海、伊予史談会、2008年4月13日、松山市
- ⑧ 鹿毛敏夫、中世末期九州の銀秤量、貨幣史研究会、2008年2月29日、東京大学
- ⑨ 鹿毛敏夫、中世都市の水辺空間、日韓港町比較研究会、2007年12月8日、名古屋大学
- ⑩ 鹿毛敏夫、戦国大名領国の国際性と海洋性、広島史学研究会、2007年10月27日、広島大学
- ⑪ 鹿毛敏夫、中世豊後の「唐人」、九州華僑華人研究会、2007年10月13日、鹿児島市
- ⑫ 鹿毛敏夫、アジアのなかの大友氏、大友研究会、2007年9月17日、大分市

[図書] (計1件)

- ① 鹿毛敏夫、戦国大名大友氏と豊後府内、高志書院、2008、全411頁

[その他]

ホームページ

- ① 鹿毛敏夫、佐賀関港の「みなと文化」、<http://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/writer.php?no=112&id=1>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鹿毛 敏夫 (KAGE TOSHIO)
 新居浜工業高等専門学校・一般教養科・准教授
 研究者番号：60413853

(2) 研究分担者

早坂 俊廣 (HAYASAKA TOSHIHIRO)
 信州大学・人文学部・准教授
 研究者番号：10259963
 H19年度

(3) 連携研究者

山崎 岳 (YAMAZAKI TAKESHI)
 京都大学・人文科学研究所・助教
 研究者番号：60378883
 H20年度

(4) 研究協力者

坂本 嘉弘 (SAKAMOTO YOSHIHIRO)
 大分県教育庁・埋蔵文化財センター・次長
 H19年度
 田中 裕介 (TANAKA YUUSUKE)
 大分県教育庁・文化課・主幹
 H19年度
 吉田 寛 (YOSHIDA YUTAKA)
 大分県教育庁・文化課・副主幹
 H19年度
 坪根 伸也 (TUBONE SHINYA)
 大分市教育委員会・文化財課・専門員
 H19年度
 中西 義昌 (NAKANISHI YOSHIMASA)
 竹田市立歴史資料館・学芸員
 H19年度